

即墮ち
2コマランドII
～ファンタジー篇～



俺は冴えない魔法使いだった
攻撃魔法…、回復魔法…、

冒険に使えるといわれるような魔法は初歩のものしか習得できず、
使える魔法は日常生活が便利になるようなしよなものもない魔法ばかり…

そんな俺は当然勇者と冒険に出ることもできず

街に住んでいても使えない魔法使いとして

蔑んだ目で見られるような存在だった…

そんな俺はある日、たまたま古魔術書屋で

古ぼけた一冊の本見つけた

タイトルは古ぼけすぎて字も掠れてよく読めない

魔術書屋の店主は「ゴミだ」と思うからと俺にその本を譲ってくれた

俺は自宅に戻り復元魔法でその古ぼけた本をなんとか解読できるまでに

戻すことに成功した。

浮き上がってきた文字を読んでみる。

「淫魔法」

聞いた事のない魔法だった。気になった俺は早速読み進めてみる。

内容は対モンスター用とされていた混乱魔法などを応用した『人間特効』の意識混濁魔法をはじめとする
己の欲望のままに研究された「対人間用」の魔術書だった。

…天啓だった。

この世界において魔法は人間に向けることは非人道的で許されないこととされていた。

それは魔法使い界の暗黙のルールであり、研究することも禁忌とされそのような魔術書は存在は許されなかった。
しかし、今、目の前に禁忌とされている研究をし、習得可能な技術として記された本がある。

自分でも驚くほど下賤な笑いがでる、今まで散々バカにされてきた恨みを晴らせるチャンスだと本能が感じた。
もう迷いはなかった。俺はすぐに淫魔法の習得することを決めた。

辛い苦手な攻撃魔法や回復魔法ではなく、自分でも習得できる支援魔法の類だ。

俺はこの禁忌とされる魔法で新たな世界を築くことを心に誓ったのだ。

：あの魔術書を見つけてから数ヶ月
俺は自分でも驚くほどの早さで
記載されていた淫魔法の習得に成功した。

そしてついにその魔法を試す時がきたのだ。
狙いは最初から決めていた。それはイフィール城だ。

「イフィール城」

それは男が足を踏み入ることができない、女だけで治められている城。
女王が子孫を残す時だけ男の立ち入りを認めるとされ、
その機会は二十年に一、二度の頻度で訪れるとされている。

そう、男がいないのだ。

もし魔法が失敗してもなんとか逃げられるかもしれない。

：が、しかし、そんなことより女しかいないという事が遥かに重要だ。

人から蔑まれて生きてきた俺はもちろん童貞だ。

だから、だからこそ、俺はとにかく女とセックスがしたい。セックスがしたくてたまらない。
男が踏み入れてはならない場所で、意識を奪い、
女という女をメチャクチャに犯したいのだ。

想像しただけで興奮してくる…、俺は興奮を抑えられぬまま、筋力増強の魔法と淫魔法の一つ
精力増強の魔法をかけ、イフィール城に唯一通じるといわれている洞窟へと足を運んだ。

「…止まりなさい、ここは聖なるイフィールへ通じる道
男は誰一人通ることはなりません
直ちに立ち去りなさい」

来たか…早速門番がお出ました…

しかしまあ女しかいないからって
こんなスケベな鎧着やがって…、そんな
犯されてえのか…やってやる…やってやるぞ…

「…? 何をジロジロと…。」

聞いているのですか? 立ち去りなさいと言っているのです」

「〜」

俺は淫魔法の一つ可視化の魔法を呟く



「…ツ?!今のは…まさか魔法?!」

貴様…まさか人間に向かって魔法を使ったのですか?!」

俺の魔法により一糸纏わぬ姿を見られている女騎士は何をされたのかもわからず、突然の禁忌に驚いて叫んでいる。

「お前、下の毛剃ってるのか?」

女戦士も手入れが大変なんだな…フフ…」

「なっ…!!!貴様ツ!!いったい何をした?!」

答えるツツ!!!」

魔法が成功したことに安堵し、魔法の効き目を確信した俺は

ついに人間の悪意が作り出した魔法、意識を奪う魔法を呟いた。

「貴様!!」

またなにかつぶや…あつ…」





「あれえ…なんでえ？
なんで私セックスしようとしてるのあ…？」

「凄い!!凄いやい凄いやい!!!」

「本物だった!!!ここまで簡単に人間を」

「意のままにできるなんて!!!」

「夢にまで見たセックスができる!!!」

「ああ…なんでもいい…チンポが欲しい…」

「入れてえ…ねえそのチンポいれてえ…」

「さっきまで敵対心をむき出してこちらを」

「見ていた騎士は下半身の装備をすぐに外し」

「自ら女性器を擦りつけいやらしく」

「チンポをねだっている。」

「ああ…すげえ…生マンコってこんなに」

「柔らかくてあったかくて…しかも愛液で」

「ネットだ…入り口でこれなら膣内は」

「いったいどうなってしまうんだ…」

「はやくう…はやくいれてえ…」

「俺はその言葉で理性を失い」

「乱暴に自分の性器を愛液が絶えず」

「溢れてくる膣内にねじ込んだ。」

ホクッ

?

?

どどど



俺は遠慮なく膣の奥の奥に
精液を流し込んでやった。
それと同時に女騎手も果てて倒れてしまった。
まさかこれほど凄い効果があるとは
しかも最初にかけた精力増強の魔法で
チンコはまだまだ女を求めていた。
俺にもう迷いはなかった。
見た女を片っ端から犯す！
そう思い城へと足を進めた。

「だっ誰?! 男?! なんてこんな所に男が?!
ここは聖なるイフィールの入り口!! 通らせるわけには行かないッ」
城の入り口にたどり着いた俺を待ち受けていたのは
城の出入りを見張る武道家らしき女だった。

年齢は…まだ10代だろうか、かなりの若さだが
入り口を任されるあたり相当な手練なのだろう
しかしそんなことよりも
気になるのは胸の発育だけだ…
早速拝見させてもらおう…
「〜」



「まっ…魔法?! 貴方、今魔法を…私に…、人間に使ったの…?!」
やはり魔法を使われるという事に動揺した武道家は驚いて大きな声を上げている。
「す…いなあ…乳ばかり目が言ってたがかなり鍛え抜かれた肉だ、
腹筋もしっかり割れてるし今まで相当鍛錬したんだなあ…」
「?!」
な、何?! 何をしたの?!」

女の声は震えている、何度も言うがこれはこの世界の禁忌なのだ。
魔法をかけられるという事を知らない人間が、魔法をかけられ、何をされたか
理解できない状況というのは相当な恐怖だろう。

「ま、まさか貴方、魔法で洞窟を守っていたエリナを…」

「ああ、あの女エリナっていうのか、お察しの通り魔法の力で果てちゃったねえ」

「…!!! 絶対許さない…!!! 殺してやる!!!」

その瞬間、女が疾風のように飛び出し、それと同時に俺はさっきの魔法をまた呟いた。



「あ~~~~気持ちいい~~~~♡」

「瞬だった。
一瞬であれほど殺意をむき出してた
女が肉便器になった。
スケベだった服をヒリヒリ引き裂き
チンコをねじ込む。
やはり身体を鍛えているだけあって
キユキユと締め付けてくる。」



「どうした?大事な仲間を倒した
人間とセックスして恥ずかしくないのか?」
「あん♡そんな事言わないでえ...♡」
言葉で責めると感じるのかはらら締め付けてくる。
これ以上は耐えられない...
俺は精液を吐き出した。」



俺の射精をじっくりとじっくりと
味わうこの武道家に先ほどの
凛々しさは欠片もない。
ただただ快楽を貪るメスだ。
その姿を見てまだまだ興奮の
収まらない俺は城内に
足を進めたー。

城内を進む俺の前に現れたのは魔法使いだった

「ふくんなるほどねえ、さっきから変な魔力みたいなのを感じてたけどそれがキミだった訳かあ」

ま、まずいな、魔法使い相手に淫魔法は通用するのか…？

それにこの余裕な雰囲気…嫌な予感がする

「お、男がいるのにずいぶん余裕そうじゃないか…」

「だって〜キミ弱っちそうなんだもん、見た感じ大した魔力もなさそうだしキミっておちこぼれでしょ？」

「…おちこぼれだとお？」

「っ呟く。」

フツッ



可視化の魔法により女は裸を見られているが
俺を馬鹿にするのに夢中で気付いていないみたいだった。

「あはっ、怒っちゃった？」「めんねえ♪だって本当に弱そうなんだもん
どうやって」「」まで来れたのかわかんないけど帰ってもらっね

本来は人間に魔法をかけるのは絶対にNGだけど

今は緊急事態だし仕方ないよねえ、ふっ前から人間に魔法をかけて
みたかったんだあ♪」

「お前ってさ、よく隙あるって言われたりしない？」

「ええ？なんのはなし」魔法を呟く。

俺を雑魚と舐めきった女の意識を奪った。



「ほりほりその弱そうな魔法使いのおちんぼ様が膣内に入ってきたぞお」
「あれえ？ちよつとまってえなんでえ？」

流星は魔法使い、ある程度の抗魔力はあるようでまだ完全に意識は奪えていないようだ。

「あでもすい」おらおらわさ...♡
もうなんでもいらいかあ...♡」

しかし子宮の入り口を亀頭が叩く頃には理性は完全に消し飛んだようだった。

カ
ク
ク
ク

は
は

は
は

ズ
ニ
ャ
ウ
ウ
ウ
♡

膣に優しく包まれながら射精する
愛液と精液でどろどろの膣内は
まるでチョコが液体になったかのようなだった。

おっほっほ

おっほっほ

おっほっほ

ほっ

ほっ

ガ

ク

グ

ド

果てた女を廊下に捨て
また俺は先へと進んだ。
まだだ、まだ全然喰い足りない。

「だっ、男性が何故」このような場所に…?!
た、立ち去りなさい!!」
次に現れたのは僧侶だろうか
青い髪の女が現れた。

「ここから先は

女王様がいる神聖な場所

なんです!! 絶対に来ないで!!」

「なるほど、この先に女王が

ねえ…」

「ツツ!! 手荒な真似は

したくありませんが仕方ないみたいですね…!!」

女王がいるという耳よりな情報を

手に入れたがまずこの女の相手が先か

この女、服を着てわかりにくいが…

スチャッ



「やっぱりすっげえ乳してやがるな」

「」」までののは初めてみたわ」

「な、なにを言ってる…!!!」

あ、あなた何をしたの?!

まさか私に何か魔法を…」

俺がニヤつきながらうなづくくと女は

怒りをあらわにした。

「悪意を持って人に魔法をかけるのは禁忌のほうです!!

それを破るのは神への冒瀆!!絶対に許しません!!!」

やはり見た目どおりの堅い人間のようなだ。

俺が優しく解きほぐしてあげよう。

この魔法でー



カッ

グッ

グッ

グッ

グッ

おはようおはようおはよう

おはよう

カッ

「ん...ん...」

それって

うしろも妻の良スマンしてたな

吸い上げてくるような動き

しやがるせうですわい

出ちまった...

さて、女王様と会ってるか。

大きな廊下を進み、行き止まりの部屋に入ると俺の足音を誰かと勘違いしたのか
背を向けたまま話し始めた女がいた

「ちよつと♡マリア、まだ早いわよ♡今服脱いでるからちよつとまっして♡」

「おいおい誰と勘違いしてんだよ」

「?!!」

誰ですッ?!お、男:?!?!なんでこんな所に…

ここをどこだと思ってるのですかッ!!

わ、私をイフィール城女王だと知つての狼藉ですかッ?!」

「へえ、あんたが女王様か」

かなり若いんだな、まだ18くらいか?」

「ただちに消えなさい!!誰か!!誰か!!!」

「こねーよ誰も、クソガキ女王様が

のんびり服脱いでる間にみんなおねんね

しちゃったからさあ

ていうか胸とか隠しても無駄だよ」

「な、なにを言つて…」

ぽん



「まだ胸は発展途上だけど尻はいい具合に熟れてきてるって感じか…これも美味そうだ」

「?!早く出て行って!!!」

「でさあ、さっき言ってたマリアって誰？」

「なんで服脱ごうとしたの？」

「レスセックスでもするつもりだったの？」

「…ツツ!!!」

「ははあ凶星だなあこりゃ、大変だなあこの城の家臣たちは。」

女王様がレスセックスを楽しもうとしている間に侵入者と戦わされて

やられちゃってるんだもんなあ。

まあ男がない空間だと性欲たまったら

そうするしかないよなあ」

「げ、下衆がっ…!!!」

「いいからいいから、俺がチンコの味を教えるからこっちはいいよホラ」

「消えなさいッ!!!誰か!!!侵入者が!!!男が入っているからッ!!!消して!!!早く消して!!!」

「…チツ、うるせえクソ女王様だ、お前は意識を混濁させるんじゃないやなくて完全に奪ってやるよ

お人形さんみたいに静かにしてる」俺は今までは違う完全に意識を刈り取る魔法を呟いた。

そしてそのまま容赦なく
子宮をザーメンで満たしていく
今まで知らなかった味を膣は味わい、
そして吸収していく。

「お、これはすごい、意識を完全に奪った
筈なのに涙が出るじゃないか
よっぽど犯されたのが悔しかったのか？w
まあ元気出せよまた犯してくるからw」
そう言い捨て、俺は帰路につくことにした。

女王を犯したし今日はこのあたりのお土産だぞ。



そう、帰路につくつもりだった。

しかし、城の廊下を歩いていると

バタバタと慌てて逃げるような音がしたので

その音を追いかけると

いつの間にか地下に来てしまっていた。

そしてこの城のメイドが一人、影で失禁しながら震えているのを見つけた。

よしよし、見つけたからには犯してあげよう。

「あの、ゆ、ゆるしてください…女王様のことは…誰にも言いません…」

「ん？お前女王を犯してるの見たのか？」

「…は、はい、そ、その、女王様の部屋に用事があって、行ってみたら

その…」

ははあ、なるほど「イツがさつき女王が言っていたマリアってヤツか。

こんな小さいメイド相手にレスセックスの相手をさせるとは

この城もなかなか狂ってるな。

どれ…



…なるほどね、

思ったとおり完全に子供体系だ。きっと年齢もそうなんだろう。

「お前、マリアっていうんだらう?」

「ど、どうしてそれを…」

「女王様と何するつもりだったの?」

「そ、それだけは…」

「教えてくれたら何もしないし、もうこの城には来ないから

本当の事を教えて欲しいな」

「…、あ、あの、そ、その…女王様をお慰めようと…」

私も、い、いつも可愛がってもらってて…」

「レズセックスしようとしてんだらう? いつもやってんの?」

「し、週に5回くらいです…」

想像以上で驚いた、そりゃあマンコも慣れるはずだわな。

こんな秘密も知られたんだし、あの女王はもう「生俺の奴隷だな。

「あ、あの、それでももうお帰りになってくださるんですよね…もう来ない…ですよね…」

「あ、それなんだけど」





胸が
胸が
胸が
胸が
胸が
胸が
胸が
胸が
胸が
胸が

ぴん

は

は

ぴん

ひよあ
あ
あ

そして絶頂を迎えた。
俺はかわいいメイドさんの
全身に精子をたっぷり
プレゼントした。
事が終わり、この地下全体を
見回してみると
さらに先へ続く道があるのを
発見した。
俺は意味もなく興味本位で
その奥へと進んでみた。

「誰…、ここから先は誰も入ってはならない禁断の部屋…」

今すぐ引き返して…」

一番奥にいたのは今までの中で一番掴めない

謎の女だった。

「へえ…男が来ても驚かないのか？」

「城の中で何が起ころうが…構わない…」

私の役目はここを守ること…それだけ…」

嫌な予感がする…

この威圧感…

魔法とかそういうのも通用しそうにない

そんな気にさせる…

だが…ものは試しか…



なんだ、魔法はちゃんと通じてるじゃないか
「へえいい体して…」

「魔法ね…、そんな魔法であなたは何が
したいの？」

バレてる?!

こいつは…今までのやつとは違う…!!

「警告はしたわ…」

一度までなら見逃してあげる

二度目はない…、今すぐここから

出て行って…」

こ、こればかりはいう事を聞いたほうが

良さそうだ…、強そうなオーラが尋常じゃない…。

…ああでもこんなに美人でエロい身体してる女を諦めるつてのは…

んんんん、いいやもう、ダメもとだ!!淫魔法をくらえ!!!





あゝ

「んだよ効くんじゃねえか!!!
ピコりせやがって!!!」
今までの女の中で一番アカい
声出してるじゃねえか
このスケベ豚!!!」

ドクンッ
ドクンッ

ぶっ
ぶっ
ぶっ

ハッ

ハッ

ハッ

グッ

グッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ
ハッ
ハッ

ゴッゴッ

ゴッゴッゴッ

「あら、貴方が封印を解いてくれたの？ありがとう」
禁断の部屋といわれた場所に入るとものすごい魔力をもった悪魔？のような生物がそこに居た。
「ふ、封印…？」

「そ、封印。この部屋に来る前に青い髪の女いなかった？私ちょっと前にこの世界をぶっ壊そうと
したらそいつに邪魔されちゃってね、ま、油断した隙を突かれただけなんだけどさ
で、長いことここに閉じ込められてたってワケ」

「…？」

「貴方聞いたことないの？数年前に魔王を封印した
勇者一行がいるって、あの女がその一人なんだけど」

「…え、あの女そんなに凄いヤツだったの？
ていうかめっちゃ犯しちゃったんだけど…。」

「えっ、ていうことは…魔王って…」

「うんうん、私。」

封印の要だったあの女の魔力がさつきすこく乱れちゃってさ
それで封印が解けたんだよね。あなたがやったんでしょ？

ありがとう♡」

な、なんだか知らないが俺はとんでもないことをしてしまった様だ

「じゃあお礼に楽に殺してあげるね♡」

ヤバイヤバイなんだか話の通じる相手じゃなさそうだ。に、逃げなければ…。
…しかしこんな口リ体系のかわいい女の子が魔王だなんて…。
裸とか見れないかな…それっ…

見れたあ~~~~~!!!



ああ完全な口リ体系だ…
ぷっくりしたお腹…
膨らみかけの乳…
あの狭い入り口にチンコをねじ込んだら
どれほど気持ちいいのだろうか…
「貴方なにしてるの？」
早く叫びながら逃げ惑いなさいよ
久しぶりに血が見れるんだから
私を楽しませる努力をなささいよ、人間」

こいつ裸見られてることに気付いてないのか？
魔王のくせに？
ていうかいま相当馬鹿にしてなかったか？
…クツツ腹立ってきた
人間みたいな体系してるし淫魔法も
ひよつとしたら効くんじゃないのか？
どうせ殺されるなら悪あがきしてやる…
「は？なにその目は？私に楯突く気？
そんなゴミみたいな魔力で？WカワイイW」
完全に切れた。瞬間、俺は淫魔法を唱えていた。

「デメエも効くんじゃねえか
クソボケが!!!魔王の癖に!!!
ガバガバ耐性で恥ずかしくねえのか
オラ!!!」

「……ッッ!!!」
「散々馬鹿にしてくれた礼だ
窒息プレイしてくれてやるよ!!!
オラ死ぬ!!!イキ死ぬッッ!!!
酸欠アクメ見せてみるッ!!!」

俺は怒りのままに
魔王のキツマンに自分の
最高に怒張したチンコをぶち込み
これ以上ないほど叩きつける。
首もへし折ってやる勢いで締めていた。
淫魔法で力の入らない魔王は苦しくて
爪を立てて抵抗しているつもりらしい。
苦しくなるにつれて膣内はキツく締めまりつねる。
体温は上がり膣内は火傷しそうなほど熱くトロトロだ。
俺は首をさらに締め上げ膣内に容赦なく吐き出した。

魔王を犯せるほどの淫魔法、

これがあれば今後一生困ることはない。

さらにこれを研究し、もっといろいろな女を

喰って喰って喰いまくって世界も魔界も俺が全て

牛耳ってやる…

即堕ち
2コマランドⅡ
～ファンタジー篇～

fin































































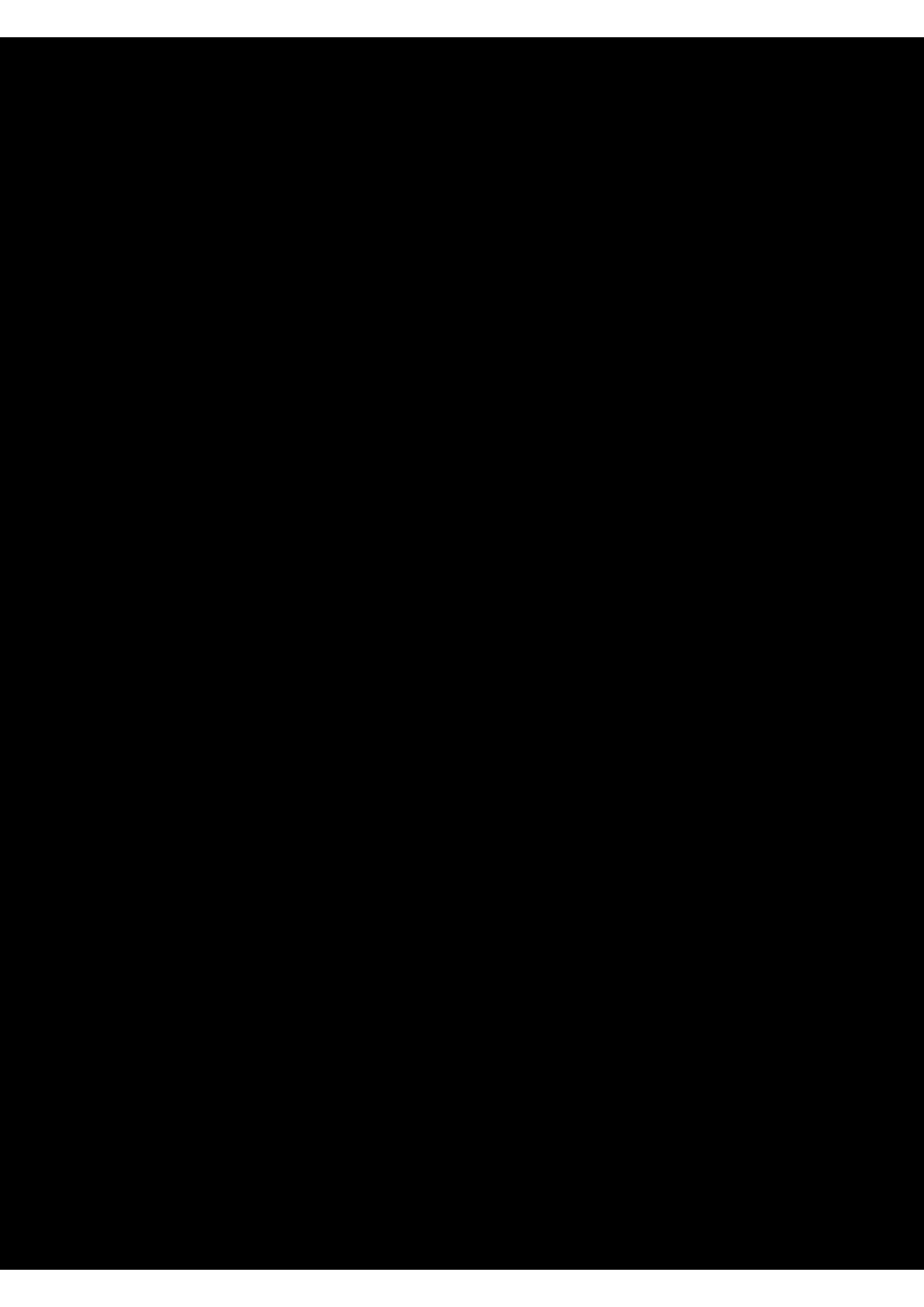


































マ
ジ
ク















ゴッ

カッ

ゴッ

ゴッ

カク

アホな母さん







びゅん

ぷん

ぷん

あーん

んん

んん

んん

んん

あーん





おっ
おっ

おっ
おっ









フゥ
フゥ

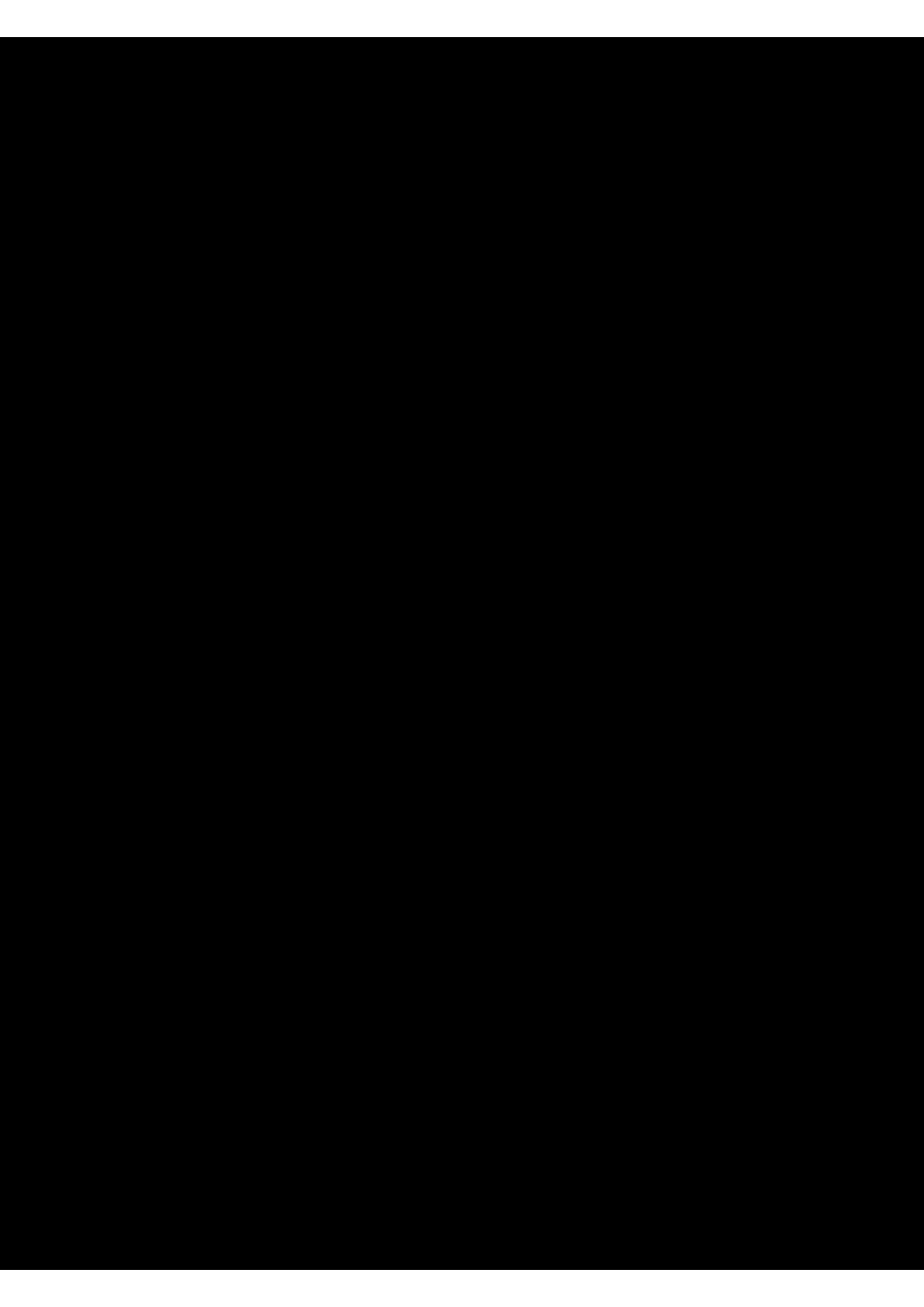
フゥ
フゥ
フゥ













「なに誰か男?! なんてこんな所に男が?!」
「お前様は誰?!」
「おのりの口をなぞり、背を撫でてくれたのは、
城の出入りを監視する武家か、しりぞいた

年齢は...まだ10代なのじゃ、かなりの若さだが
入りの口をなぞるあたり相手を手練なのだろう
しかし、なんでも、
気がするのだから、お前様は...
早急準備をせよ、お前様...
「...」

俺の射撃をじつくりとにへへで
味わうこの武道家に先ほどの
凛々しさは欠片もない。
ただただ快楽を貪るメスだ。
その姿を見てまだまだ興奮の
収まらない俺は城内に
足を進めた!



膣に優しく包まれながら射精する
愛液と精液で溢る膣内は
まるで「デン」が液体になったかのような感じだ。

果てた女を風下に捨て
また俺は先へと進んだ。
まだまだ、まだ全然喰い足りない。



城内を進む俺の前に現れたのは魔法使いだった
「ふんなるほどねえさつきから変な魔力のたいなのを感じてた
けどそれがキミだった訳かあ」
「まあ、面白いな。魔法使いの相手には淫魔法は通用するの...?」
「それ」この余裕な雰囲気。嫌な予感がする
「お、男がいるのにすいぶんと余裕そうじゃないか...」
「だって、キミ弱っちそうなんだもん、見た感じ対した魔力もなさそうだし
キミっておちこぼれでしょ?」
「...おき」ほれたぞおっ」
「...」んんん。

フン



その瞬間、彼女が
子宮をサーッと濡らす
今まで知らなかった快感を膣は味わった
そして吸収してゆく
「お、これはすごい、意識を完全に奪った
皆んなの視線が止まるほどだから
よほど犯されたのが悔しかったのか、
まあ元気に吐き出した犯しは、
その言葉だけで俺は満足したよ、
女王を犯した、今日はおめでたさ、さっさと帰ってな。」



大きな廊下を進み、行き止まりの部屋に入ると俺の足音を誰かと勘違いしたのか
背を向けたまま話し始めた女がいた
「ちょっと♡マリア、まだ早いわよ♡今服脱いでるからちょっとまって♡」
「おいおい誰と勘違いしてんだよ」
「?!」
誰ですッ?!お、男?!?!なんでこんな所に…
「ここをどこだと思ってるのですかッ!!」
わ、私をイブール城女王だと知つての狼藉ですかッ?!
「へえ、あんたが女王様か」
かなり若いんだな、まだ18くらいか?
「ただちに消えなさい!!誰か!!誰か!!!」
「こねーよ、誰も、クソガキ女王様が
のんびり服脱いでる間にみんなおねえな
しちゃったからさあ
ていうか胸とか隠しても無駄だよ」
「な、なにを言つて…」

